
Egoistic Reality

三月やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E g o i s t i c R e a l i t y

【Nコード】

N 0 7 9 5 B

【作者名】

三月やよい

【あらすじ】

何不自由ない生活を送っていたはずの大学生・敏哉の最近の悩みは首に付く小さな傷跡……。それは彼の知らない妹の秘密……。

sister (前書き)

兄妹のお話を書いてみたかったです。

題名は瑠香ちゃん視点からとりました。

やっぱりまだまだ稚拙ですがお付き合いいただけたらうれしいです。

sister

がしゃん

重い金属がこすれあう音が薄暗い部屋に響いた。

明かり取りの窓から微かに日の光は差し込んでくるが

部屋全体にまでは到底行き渡らない量だった。

エアコンで室内は適温に保たれているので敏哉の薄手のシャツとジーンズという服装でも

寒さや暑さは特別感じなかった。

「もう何日経ったのだろう？」

意識的に声を出さないと気が狂いそうになってしまふ程の静寂さが時の流れを麻痺させていた。

窓からの微かな明かりで昼夜は区別がつくがいくつの夜を迎えたかもう敏哉は覚えていなかった。

取り敢えず、学校の方は春休みなので心配はない。

もつとも、そんな心配も生きてここを出られて初めて意味のある心配になる、ハナシだが。

「瑠香……」

妹の瑠香が心配になった。

(どうして……)

大学3年最後の春休み。

配属される研究室も決まりあとは4月からの授業と研究まで晴れて自由の身だった。

敏哉が通学している都内の私立大は実家から電車で30分程だし卒業後は進学するつもりなので就職活動の戦渦に晒されてもいない、実にのんびりとしてみえるであろう学生だった。

身長178センチとかなり長身で中高時代はテニスで鍛えたスタイルは細身。

顔立ちはやや女性的ではあるが美人であつた母の血と
精悍な顔立ちの父の血を引き継ぎ容姿で損はしない程度には恵まれ
ていた。

界限ではお嬢様学校で通る女子校に通う高校生の妹とも適度に仲も
良く、

母は5年前に他界したが父は男手一つで敏哉と妹を何不自由なく育
ててくれた。

（きつと何も大きな心配事なんでないんだ）

そう思えるほどに彼の周辺は平和な日々だった。

大きな心配事はない。

大きなことは・・・

ただ一つ小さな悩みといつたら最近朝になると首筋に出来ている小
さな傷くらいだった。

s i s t e r (後書き)

感想いただけるとすごくうれしいです。

小さな跡（前書き）

私は昨夜、蚊に食われた跡が首筋についていました。
もう秋なのに・・・（涙）

小さな跡

朝、洗面台の鏡の前で気付く左首筋にある小さな傷二つ。

最初は洋服のタグがボタンにでも引っかかったのかと思って気にも止めなかったが

ほぼ毎朝その傷は付いていて何故か夜には消えてしまう。

傷と言っても小さなカサブタになっているだけで触れてみても痛くも無ければかゆみすら感じず、気が付くとカサブタは消えていた。

（こんなホラー映画なかったけ？・・・そうだ・・・）

「吸血鬼みたいですね、八雲先輩」

「!？」

ぼんやりと学部掲示板の前になつていたら、

考えていたコトを言い当てられ敏哉は不意に頬が紅潮し声の主を凝視してしまった。

「あ、ごめんなさい。怒らせるつもりはなかったんです。

ただその首筋の傷がまるで吸血鬼につけられたみたいですねって
穏やかに笑いながら1学年下の男子学生・岡見 京介が敏哉の首筋を指さした。

「やっぱりそう思う？」

「はい。面白いトコロに面白い傷つくりしましたね。どうしたんですか？」

「それがさあ俺にも判らないんだよねえ」

「じゃあやっぱ吸血鬼っすよ。八雲先輩格好良いから」

笑いながら冗談を言いつつも岡見は察するような目でしげしげと首筋を見た。

「これ、どうして着いたと思う？」

敏哉はいつも考えて答えがなかったので好奇心から聞いてみた。
情報科に在籍する自分よりも生物工学科の岡見の方がもしかしたら

変な虫やらに

詳しいかもしれない、と考えたからだ。

「そうっすねえ……そうだなあ……ひっかき傷じゃあないし……」

妥当なところでダニですかねえ」

ダニだったら毎日同じ場所のみに傷を作ることはないだろう、

しかし毎朝この傷が付いていて夜には消えるなんてことを知らない

岡見が

ダニと考えるのは妥当だった。

「やっぱそうかなあ俺、ちゃんと布団干そうかなあ」

「そうですよ。殺菌殺菌」

岡見は学科が違うのに何故か何かと敏哉に懐いてきてくれ、俊哉としても何かとかまっていたら今では学内では結構よく話す方になっていた。

人当たりもよく話も面白い岡見とは生物学と情報科学を融合させられないかなどという

青い学術話から学部内ナンバーワンの美人学生の話まで

実に幅広く話せる貴重な後輩の一人だった。

妹しかいない俊哉にとっては可愛い弟、おそらく岡見にとっても優しい兄

といった役回りなのだろう。

「岡見って一人暮らしだよな？春休みは実家戻るの？」

「いや、バイトもあるし俺実家遠いので金かかるし帰りません」

あれ？岡見の実家ってどこだったけ？と聞こうとしたら

「ってことで春休み中、暇なんで飲みでも何でもお供しますよ」

Vサインなんて作りながら愛嬌ある笑顔で岡見が言った。

「おっ！じゃあ俺も混ぜて」

イキナリ話に入ってきたのは俊哉と同じ学年同じ学科の望月 大輔だった。

「あ、望月先輩。ちーすっ」

「うつす、岡見。お前追試とかなかったか？」

「おい、望月。コイツはお前より優秀だぞ？」

「そいえばそうだった。お前より俺のが追試危ないよなあ」

岡見はばーんつと豪快に背中を叩かれてよろけそうになった。

どちらかといえば細身の俊哉や岡見とは違い、

望月はバスケ部でしつかりと鍛えている体躯と180センチ台の恵まれた身長で

どこから見てもスポーツマンといった雰囲気だ。

「で、さ。お前ら遊ぶ予定立てているなら結構暇だよな？」

俺んちさあテレビ壊れたちゃったんだよ。

そこで！お願いだ！八雲！！

お前んちでゲームやらせてくれないか？」

「何かやりかけのゲームでもあるんすか？」

「そうなんだよ！岡見、お前『ZONBOID』クリアしたか？」

望月は1週間ほど前に発売されたばかりの前評判のよかったシューティングゲームの名を挙げた。

「あ、俺まだ買ってないんすよ。どうつすか？面白いつすか？」

「おう、こいつぁスゲエぞ。ってことで八雲。

このとおりだ。

お前のうちのあのでっかいTVでこのゲームをやらせてくれ！」

望月は最初から敏哉にそれをお願いするつもりだったのだろう。

トートバックからソフトを出すと「お前んちPS2あったよな？」

と満面の笑みを見せた。

まあどうせ特別やることもないし・・・敏哉は放課後の予定を思い浮かべてみたが

特別何もなので

「いいよ。岡見もせっかくだから来いよ」

そう軽く望月の願いを聞き入れた。

小さな跡（後書き）

大学生の春休みって長くてうらやましい!!

瑠香（前書き）

可愛い妹・・・好きですか？

瑠香

「俺、車で来ているのでそれでいきませんか？先輩のトコ駐車場ありますか？」

「家の車あるけれど駐車場2台止められるからいいよ。」

理工学部のある建物から駐車場まで男3人でのんびり歩いていると「こいつの妹、超可愛いんだぜえ。もうね、アイドル並みだよ。」

つくしよー、八雲も顔いいしなあ俺もイケメンになりたかったなあ」

手をつなぎながら歩いているカップルを横目に望月がぼやいた。

「そんな、望月先輩だって男らしくてモテそうですよ」

「そうか？岡見君、お前良いヤツだなあ。今度飲もつか」

「マジっすか？ありがとうござーっす」

どちらかと言えば少々人見知りする俊哉と違って

岡見は誰とでも馴染むのが早いように見える。

まだ1〜2回程しか顔を合わせてないはずの望月と既に打ち解けている様子を見ると

その人懐っこさがうらやましく感じた。

学校から自宅までの運転中も2人の掛け合いは続き

俊哉はたまに話を振られ答えるといった会話形式が続いた。

「あ、八雲先輩この道あつてます？」

「大丈夫だよ。次を右に曲がって3軒目だよ」

「あざーす」

かなり略式なお礼を言い岡見は安全運転で敏哉の自宅ガレージにきっちり駐車した。

「おじゃましてーす！」

二人の挨拶が重なった。

「きつと誰もいないから遠慮しないでいいよ。」

「あれ？妹さんいらっしやるのじゃないですか？」

「妹は今日はピアノがあるから7時くらいにならないと帰ってこないよ。」

父は向こう2週間オーストラリアへ出張なんだ」

母親は？

岡見は疑問に思ったが人の家庭環境をとにかく聞くのはよくないだろうと言葉を飲み込んだ。

既に何度か敏哉の自宅にお邪魔している望月は手慣れた調子で敏哉の自室のプレスステ2をセットし警察官や女子高生といった様々なキャラクターが

ゾンビを拳銃で打ちまくるはやりのゲームに熱中し始めた。

「俺もやっていいっすか？」

岡見はもう一つのコントローラーを手に取りうきつきといった様子で望月に尋ねた。

「いいぞ。んじやお前後方援護して」

「はいっんじや俺、スーザン使いますね」

岡見はビジネススーツに身を包んだ秘書風キャラクターを選択し、ゲームに加わった。

敏哉はそんな二人のゲーム画面をぼんやり見ながらなんともなしに専門誌を手に取り

頭には入らなかったがぱらぱらとめくった。

（何かお茶やお菓子でも出すかな・・・）

ゲームに興じる二人を眺めながら考えた時

「ただいまー」

玄関から瑠香の声が聞こえた。

「お帰り。早かったね。ピアノは？」

階下に降り、リビングのソファにドサツと学校指定鞆を置いた瑠香に尋ねた。

「お兄ちゃん。今朝言っただじやない。」

今日のピアノは先生が演奏会でいないから来週の土曜日に振り替えだって・・・」

あ・・・そう言えばそんな事を言っていたような気も・・・

「すまん。すっかり忘れていた」

「もー、お兄ちゃん忘れっぽいんだから！

そうだ。お客さん来ているの？」

玄関の靴を見たのだろう。

「うん。俺の部屋でゲームしに友達が二人来ているから・・・」

「そう。どうする？お夕食食べていってもらう？」

そうだったら何か作るけれど・・・」

母が死んでから家事一切を瑠香が取り仕切っている。

高校生でありながら掃除も洗濯も料理も普通の主婦並みにできており、

その中でも料理に関しては凝ったお菓子から和食まで幅広く作ってくれる。

瑠香は中学生になったと同時に家事を少しずつではあるが父から積極的に教えてもらい、

炊事、洗濯・・・そして最初は敏哉の役目であった掃除担当も引き受けるようになった。

そんな姿を父は素直に喜び、兄である敏哉も申し訳ないと思う反面自分の負担が減ることと自分がするよりも遥かに手際良くきれいに掃除する

瑠香の手腕に拍手を送った。

「どうする？」

制服のジャケットを脱ぎ小首をかしげた。

「あ・・・んと、聞いてくるよ。」

敏哉はインスタントコーヒーを探しながら空ろに答えた。

「もう、お兄ちゃん。お客様にお茶出したいの？」

じゃあ私やるからお兄ちゃんお部屋行っていていいよ。」

もたもたしている兄を見て瑠香はくすりと笑った。

「いいの？ありがとう。俺台所よくわからなくて」

こんな時に炊事周りすべてを瑠香に頼り切っている現状を痛感して

しまう。

瑠香も今は高校生だから時間があるが、これが大学生になり社会人になったら

今のように家事に時間も割いていられないだろう。

そろそろ自分も色々覚えなといけないかもしれない・・・

敏哉は階段を上がりながらぼんやり考えた。

瑠香（後書き）

妹が欲しい今日この頃です

賑やかな食卓（前書き）

ご飯作ってくれる方が欲しいです（笑

賑やかな食卓

「どうぞ。コーヒーとシュウクリームです」

コンコンと控えめなノックの後、部屋に入ってきた瑠香はブレザーを脱いだ制服姿のまま手に人数分のコーヒーそしてシュウクリーム

を載せたお盆を手にしていた。

部屋に広がるかぐわしい香りから察するにインスタントのコーヒーではなく

ちゃんと豆を挽いて淹れてくれたのだろう。

「ミルクとお砂糖必要な方はどうぞ」

敏哉の部屋にある小さなテーブルにすべてを置き客人たちににこやかな笑顔を向けた。

「あ……」

瑠香を見て岡見が目を見開き驚いたような表情をした。

「驚いたろ？さっき言っていた瑠香ちゃん。な？アイドル並みだろ？」

望月が何故か得意げに岡見を小突いた。

「あ……えと、初めまして。」

八雲先輩の後輩。岡見です」

「初めまして。妹の瑠香です」

二人で何故かたどたどしく自己紹介をしあった。

瑠香は『アイドル並み』なんて言われ照れているのか頬を上気させており、

岡見は照れているそぶりを見せながらもちらちらと瑠香を観察しているようだっただ。

アイドル並み……確かにその言葉に遜色ないように思えた。

白い肌に真っ黒なストレートヘアは校則で決まっているのだろうか？両耳の下で二つに束ねられており清潔な印象を与え、

目鼻立ちは兄の敏哉と並び非常に整っており、特に目は兄のそれよりもぱっちり大きくアーモンド型に見開かれていた。

小柄な身体は華奢で緑のタータンチェック柄のブリーツスカートと灰色のベストそして

赤いリボンといった有名女子高の制服が実によく似合っていた。

「あ・・・の・・・みなさんもしも良かったら夕食召し上がっていきませんか？」

恥ずかしそうにうつむきながら瑠香は立ち上がり部屋を出て行く間にそう言った。

「あ・・・どうする？最近ずっと二人だけの食事結構さびしいんだよね。」

「良かったら食べていく？」

望月も岡見も一人暮らしなので時間に余裕があるのならば食べていつでももらうのも悪くないだろう。

「俺食べたい！」

望月は元気に手を挙げた。

「あ、じゃあ俺もお言葉に甘えて」

後輩である岡見は気を使つてか望月に同意をする形で控えめに手を挙げた。

「わかりました。」

「じゃあ皆さんの分作りますね。」

大人数で食卓囲むの久しぶりなので楽しみです」

瑠香はうれしそうな笑みを見せ部屋を出て行った。

「やりー。瑠香ちゃんの手料理が食べられる」

望月はお気楽に喜び

「あ・・・大丈夫ですか？迷惑じゃないですか？」

岡見は気を使つて敏哉に尋ねた。

「いいよ。」

ウチ母親なくしているし今父親は出張中だから

最近一人か二人でご飯食べているからみんなでご飯って

結構ありがたいんだよね」

先ほど言ったことをまた繰り返した。

「そうなんですか？じゃあ喜んで」

ありがとうございます。と岡見は頭を下げた。

「いいよ。別に。溜香もきつと大人数分作るほうが楽しいだろうしね」

「一人暮らしなのでこんなちゃんとした家庭料理久しぶりです」

岡見はうれしそうにブリ大根をつつき

「うまーいっ！俺お稲荷さん大好きなんだよぉ〜嬉しいなあ」

とばくばくと食べる望月。

「喜んでいただけるとうごくうれしいです。沢山食べて下さいね」
頬を上気させながらゆっくりと箸を進める溜香、と至極平和な食卓となった。

メニューはブリ大根に手羽先のあぶり焼き、そして生野菜のサラダとお稲荷さん・・・

ブリ大根は臭みをとるためにブリは予め茹で、一度茹で汁を捨ててから大根と圧力鍋で

煮込んであるしお稲荷さんの中はちゃんと具から作った五目ごはんといった

手の込んだメニューだった。

やはり大人数の食卓がうれしいのだろう。

いつもそれなりに凝った料理を作ってくれるが今日はいつもよりもかなり豪華だ。

「すげー八雲いいなあ毎日ウマイ料理食えて」

出されたビールをぶはーっと飲み干し豪快に望月が笑った。

「じゃあたまに食いに来いよ」

「え！？いいんですか？」

岡見も便乗して身を乗り出すと「お前が来ると俺の分が減るっつとか言いながら」

望月が岡見を制する・・・漫才のような賑やかな食卓、

これはこれでたまには楽しいかもしれない。

敏哉は二人の掛け合いと、瑠香の笑顔を見ながらぼんやり考えた。

賑やかな食卓（後書き）

穏やかな日常の奥底には色々なモノが眠ってます

闇（前書き）

心の闇

それはもしかしたら誰にでもあるのかもしれない

闇

「お兄ちゃん、ちょっと手伝って欲しいの。」

この荷物を地下室まで運びたいんだけど重くて・・・」

望月と岡見が帰った夜、瑠香はリビングで寛いでいる敏哉にお風呂上りの瑠香は昔の教科書や本などが入ったダンボールを差し出した。

「ああ、大掃除するって言っていたもんな」

「うん。本棚片付けたの。」

私こつちもつからお兄ちゃんこつちの大きいほう持ってくれる？」

「いいよ。大丈夫。俺が2つもつから瑠香は扉とかあけて？」

敏哉は大きなダンボールの上に小さな方を乗せながら持ち、瑠香を促した。

2階へ上がる階段と比べると一回り小さい階段が

今は物置として使われている地下室へと続いている。

以前は母がバイオリンを弾くための部屋として使われていたが

今は使わなくなった本や家具類が置かれているだけだ。

「地下室も少しは片付けなくちゃな」

「ううん。先週ちょこつと片付けたから結構キレイよ」

地下室へ降りると瑠香の言葉に素直に頷けた。

6畳ほどの広さに本棚3つにもう使わなくなったシングルベッドが置かれている

その部屋は十分に換気がなされたらしく

地下室特有の埃っぽさはなく床もキレイに掃除されていた。

「この部屋もちゃんと照明つけければ普通の部屋として使えるよなあ」
持って来た荷物を仕分けしやすいように本棚の前に置き感想を漏らした。

「そうね、今は階段からの明かりだけだからちょっと暗いもんね。
でも・・・我慢してね？」

え？我慢って？？

敏哉が口にしようとした途端、瑠香が首に腕を絡めてきたかと思うとそのまま「がぶり」と首筋に牙を立てた。

「ちょ・・・なん・・・ま・・・」

視界が暗転し目が覚めた時には敏哉はとらわれの身の上になっていた。

瑠香は薄手のスリップだけの姿で手に燈台を持ち地下室に降りてきた。

蠟燭の灯りがゆらゆらと瑠香の曲線に陰影をつけた。

「お兄ちゃん。御飯食べてないの？」

瑠香はベッドスタンドの上に用意していた

シチューにもパンにも手を付けてないのを見て言った。

「だめだよ。私が血吸ってるんだからちゃんと食べなきゃ」

「瑠香！お前おかしいよ！

これは異常だぞっ父さん帰ってきたらなんて説明するんだ！？

普通じゃないぞ！」

「お父さん？大丈夫よ。まだ当分あつちなんだから・・・」

くすくす・・・瑠香は笑いながら異常なまでに冷たい指で俺の頬をそつとなでた。

瑠香の指はこんなに冷たかっただろうか？

瑠香は今までこんな表情をしていただろうか？

「メール毎日来るけれどちゃんと『二人とも元気よ』って返してるから

心配もしていないと思うわ」

電話とちがつてメールだとお兄ちゃんのフリするのも簡単だしね、そう続け瑠香はふわりと俺の上に跨った。

「足かせ・・・痛くなあい？」

正面から抱き合うような姿勢で瑠香は俺の首に手を回しながら尋ねた。

一体何処で手に入れてきたのだろうか？

足かせは鉄か鉛かはたまたステンレスか何か判らないが
重い金属で出来ていることは確かだろう。

しかし内側が布張りになっていたので激しく動いたりしなければ痛
くなることはなかった。

「よかった。傷にはなっていないみたいね」

敏哉の手足を観察し瑠香は嬉しそうに抱きついてきた。

「ああ」

ちくつと皮膚に何かが刺さる感触がした。

しかしそれは一瞬だけで後は痛みというより何だかくすぐったく感
じる・・・

いつもの吸血行為だった。

「・・・お兄ちゃん・・・血少なくなっちゃうよ？」

耳元で子供をあやすように瑠香が囁いた。

「こん・・・な・・・」

こんなコトは普通じゃない！そう言いたかったが敏哉の意識はそこ
で途絶えてしまった。

闇（後書き）

まだまだ続きます

母の面影

どれくらい意識を失っていたのだろうか？

気が付くと敏哉は一人になっていた。

明り取りの窓からの光より察するに昼頃だろうか？

すると半日くらい気を失っていたことになる。

そつと首筋を触ると小さな瘡蓋が出来ていた。

「瑠香はなぜこんなことを・・・」

瑠香の夢みるようで焦点の定まっていないうその表情には見覚えがあった。

母・塔子の最後の表情と一緒にだった。

元々身体の弱かった母は瑠香を生んで直ぐに精神のバランスを崩し入院してしまった。

今でも最後に母のお見舞いに行った時のコトは忘れない。

白い・・・真つ白い病室で同じように精気がまるでない程に白くなつた母は

とても綺麗だがその表情はどこか作り物めいていた。

「ぼうや、どこの子？」

もう子供である俺のことすら覚えていなかった。

「ママ・・・僕だよ？敏哉だよ？」

まだ現実を受け入れるのは幼かった敏哉は

母親を困らせるようなことを言つたのかもしれない。

「ひどいよ！ママ僕を忘れちゃったの？僕はいらないうなの？」

泣きじゃくりながら敏哉は母のベッドにすがりついた。

「・・・ごめんなさいね・・・」

母の困つた様な表情でありながら焦点の曖昧な眼差し、

そして優しい手が今でも思い出される。

母を見たのはそれが最後だった。

その日の夜、母の様態は急激に悪化し延命治療もむなしく

その日のうちに帰らぬ人となってしまうた。

瑠香は母と似ている。

それは顔立ちや体質だけではなくおそらく精神的なものも似通っていたのかもしれない。

もう母のように正気を失ってしまったのだろうか？

だからって何故、吸血鬼の真似事みたいなことをするのだろうか？

いや、真似事ではなく本当に吸血鬼なのだろうか？

兄を地下室に閉じ込める。

ここまでは確かに常軌を逸した行動ではあるが物理的に可能な出来事だ。

しかし牙で血を吸い、噛み跡が消える傷を首筋につける……。

これは人間離れしている芸当としか言いようがない。

瑠香は少々引つ込み思案なところはあるが普通の女の子だ……と兄の目からは思っていた。

普通に学校に行き普通に友達と遊び普通に家族と暮らしている。

いつからおかしくなったのだろうか？

そしていつ正気に戻るのだろうか？

いいや。もう戻らないかもしれない。

母が正気に戻ることなくこの世を去ってしまったように……。

「それならば……」

自力でここを出るしかない。

そしてこんな馬鹿なコトは止めさせて今までのような普通の生活に戻るんだ。

敏哉はいつもほとんど手を付けていなかったベッドサイドの食事に手を伸ばした。

（体力が落ちているのが判る……これじゃあここを自力でなんか出られない）

少し味の薄いシチューをただただ機械的に喉に流し込みながら現状を再認識していた。

混血の可能性（前書き）

岡見京介。

覚えていてくださる方がいたらすごく光栄です！

混血の可能性

駅前の立地条件が良いチエーン系ファミレスでも

流石に平日の夜11時ともなると客の数はそう多くはない。

岡見京介は2杯目のブラックコーヒーを飲みながら

「いやぁ・・・最近のファミレスのコーヒーって結構美味しいよね
え」

とのんびりつぶやいた。

「そうですねえ・・・」

純一は相槌を打ちながら自分のコーヒーにミルクをたらした。

「・・・やはり、日本での過去の混血の記録などは・・・」

目を伏せながら口を開いた純一に

「あ、そうそう。俺らって同じ学年ってなってるんだからさ、

敬語やめようよ、ね。」

「いえ・・・でもそういうワケには・・・」

吸血鬼族を束ねる族長を前にして純一は言葉を濁した。

いかに幼馴染のように育ったとはいえ立場を考えると自然、敬語になってしまう。

「いいからいいから。ま、これも命令ってことで」

「・・・はぁ・・・じゃあそうさせていただきます・・・」

「じゃなかったそうするよ・・・」

「つてかさ、前はタメ語だったじゃん？」

「そりゃ京介が族長ってしらなかったもん」

「公言するのモ・・・ねえ。恥ずかしくない？」

「そ・・・ゆもんかあ？」

んー？純一は首を傾げてしまうが京介とは長く付き合いがあってもどこか判らない事が多い。

そんな彼の考えを理解しようとするのは無駄に思われた。

「で、だ。京介に頼まれた過去の混血児の存在だが・・・」

やっぱり記録はおろかウワサになったことすらないらしい。

尤も、ウワサに関しても辿れるのはここ200年くらいの話だけどね」

「そっか・・・あれはねえ、うん。きつと血が混ざったのはすごく昔だねえ。」

俺にも全く気付かなかったもん。

魔物に対しての感応能力もほとんどないんじゃないかなあ？

でもさ、面白いね、そう考えると。

もしかしたらこの日本で八雲先輩たちのご先祖様になったハーフやクォーターの吸血鬼が

まだ生きているかもしれないってことだもんね。

純一の仲間もいるかもよ？」

「はは・・・ハーフがそこらにごろごろしていたら俺のありがたみってなくね？」

「確かにねえ・・・なかなか生まれないしなかなか育たないからレアなんだもんねえ」

育てばその魔力は族長クラスなのにね、と京介は面白そうに言った。

「ま、おそらく生きている可能性はゼロに等しいんだろうなあ・・・きつと・・・」

「これだけ狭い国だもん・・・」

純一は頬杖付きながら遠くを見る目になった。

「純一は最近どうなの？実希ちゃんとうまくいつてる？」

最近、人間から吸血鬼一族に迎えたガールフレンドの名前を出すと純一は心なし表情が緩んだ。

こんな幸せな表情をした吸血鬼が増えてくれればいいな。

京介は目を細めながら彼女との近状を語る旧友を眺めた。

混血の可能性（後書き）

感想いただけたら励みになります（ぺこり

望んだ結末の行方（前書き）

カラオケ好きなんですが（汗

望んだ結末の行方

3年生が自由登校にはいつているので学校は何だか人口密度が少なかつた。

「るゝかゝつ」

クラスメートの千夏は独特な鼻にかかった甘い声で話しかけてきた。なあに？と瑠香が振り向いた時にはもう千夏は瑠香に飛びついてきて「ねえねえ最近付き合いわるーいっ。今日はカラオケ行こうよぉ」子犬のように千夏は「ねっねっ」と愛嬌一杯に上目使いで懇願してきた。

「ごめんね。今日はちよつと・・・最近喉の調子も悪いし・・・ごめんね」

瑠香は心底申し訳なさそうな表情をし

「来週末に遊ばない？そろそろ春物のお洋服みたいなあと思ってるの」

とにつこり続けた。

千夏はぱあつと表情を明るくし

「うんっ楽しみっ」

と瑠香の手をとりぶんぶんと振り回した。

「じゃ、ばいばーい！」

今日もしも気変わってカラオケ行きたくなったらメールしてねん」教室の出掛けに千夏は自分の携帯を片手に持ちながら手を振った。

「うん。そんな時はよろしくー」

千夏はきつと別の友達を誘ってカラオケにでも行くだろう。

人懐っこくて元気で行動力のある千夏が瑠香は羨ましかった。

少々引つ込み思索気味で人見知りしてしまう気質がある瑠香は

昔から兄の後ろに隠れておどおどしているような少女だった。

いつも瑠香の前を歩いてくれた兄。

頼りになる「お兄ちゃん」。

そんなお兄ちゃんが兄ではなく「男性」として気になり始めたのはいつごろからだろうか？

兄の携帯にメールや着信がある度に言いよつのない焦りや嫉妬が頭をもたげるようになった。

普通の大学生ならば彼女くらいいるだろう。

しかも兄・敏哉は鼻屑目に見なくても格好良く性格だって悪くない、きつとモテるだろう。

学校からの帰りが遅くなるとき、休日に出かけるとき、いつも不安になった。

もしかしたら私はブラコンなのだろうか？

しかも行き過ぎた……。

兄の首筋が気になり始めたのはもう半年前。

最初は何で気になるのかわからなかった……でもある日気付いた・

・

これは血への渴望だと。

それ以来、普通のご飯が美味しく感じなくなった。

兄や父へご飯を作らなくてはいけなかったので料理は変わらず行っていたが。

父が海外出張と知りこれはチャンスだと兄を地下室に閉じ込めた。ずっとこうしたかった。

兄を誰の目にも入らない空間に隔離したかった。

でもこの後どうするの？

私が望んだ結末はどんな結末？

京介（前書き）

もう少しで結末です！

緊張感あんまりなくてすみません（汗

京介

片足につき3個の六角レンチで止めてある足枷のネジは俊哉の力では手でちよつと回したくらいじゃぴくりとも動かなかった・・・

これは閉じこめられた初日に既に試したことだった。

昔、網走刑務所で拘留されていた受刑者がみそ汁の塩分でネジを錆びさせて脱走した

とのエピソードがあつたことを思い出した。

それを試してみようか・・・？

しかしながら気が遠くなるような日数がかかる上に足枷がステンレス製の場合、

努力と時間は無駄になつてしまう。

（これが一番かもしれない）

敏哉はベッドのポールに足枷部分を強打した。

（溜香の・・・女の子の力で締められているなら・・・

もしかしたら衝撃でネジが緩むかもしれない）

この時間ならばまだ溜香は学校から帰つて来ない。

ポールに打ち付ける時の足枷越しの刺激で足首がしびれて来るがそんな事、

気にしていられなかった。

「緩んでくれ・・・」

敏哉は体力の続く限り同じ行為を繰り返した。

いつも通り学校から帰宅すると駐車場に見知らぬ車が止まっていた。見知らぬ？・・・いや、違う。

この車はこの前、敏哉の友人らが来たときにも見た覚えがあつた。

（なぜ？お兄ちゃんに会いに来たの？）

そつだとしても勝手にガレージに車を停めておくとは厚かまし過ぎ

ないか？

（とにかく・・・おにいちゃんは不在っていつて帰ってもらわなくちゃ）

ぎゅつと学校指定鞆の取手を強く握り瑠香は自宅の敷地に足を踏み入れた。

「こんにちは。瑠香さん。」

悪いけれど勝手に駐車場使わせてもらったよ」

予想通りこの前来た友達・・・いや、確かこっちは後輩の岡見という男だ・・・

が敷地内の階段に腰をかけて待っていた。

「こんにちは・・・あの・・・お兄ちゃん今日は帰って来ないですよ？」

岡見は立ち上がり

「あれえ？そうなの？そつかぁ・・・帰って来ないのかぁ・・・」

「

端正な顔にちよつと困った表情を浮かべて

「それってここには居ないって事なのかなぁ？

ねえ瑠香さん。君が昨夜吸ったのって先輩の血でしょ？」

と続けた。

血！？

何でこの男は知っているのだろう？

「君はいくら吸血行為を繰り返したって変わることはできないよ？」

「何よ・・・貴方が何を知っているというの？」

シラを切ればいいものを思わず言葉が出てしまった。

「知っているよ・・・瑠香さんが吸血鬼の真似事をして八雲先輩の血を吸っていること」

「・・・何でそんなこと・・・」

「何で？だって・・・匂いがするもん・・・新しい血の・・・

俺も吸血鬼だから」

吸血鬼！？

壁に瑠香を押し付け

「ねえ。八雲先輩の居場所知っているよね？」

相変わらず優しい声。でも瑠香の細い肩を押し付ける力がこの質問に強制の色合いが含まれていることを示していた。

「・・・大声だすわよ・・・」

わずかに震える声でありながらも瑠香は気丈に岡見を睨み返した。

「大声？だせる？」

岡見はそつと指を瑠香の額に当てた。

「あ・・・」

なぜだろう？瑠香は凍りついたように声がなくなってしまった。

口をぱくぱくさせることは出来るが何故か声がでず、

出るのはうめき声のような意味を成さない音だけだった。

「わかる？これが真似っこじゃない本物の吸血鬼のチカラ」

につこり岡見は「君の脳の言語中枢にちよつとお休みしてもらっているからね」と続けた。

「さて・・・じゃあ答えてもらおうかな。

喋れないだろうからうなずくか首振るかで答えてね」

その問いかけに瑠香は首を背け拒否を示した。

「へえ、見かけよりも気が強いのかなあ・・・」

いいよ。んじゃ身体に聞いてもいいし・・・」

そう言っていると岡見は楽しそうに瑠香の制服のリボンに手をかけた。

カチツと制服のリボンをはずす音が聞こえると

「あ・・・」

涙目になりながら必死で瑠香は首を振り

「答えてくれる？」

との岡見の問いに大きく頷いた。

穏やかに見えるがこの男・・・脅迫しなれているのかもしれない。

「よかった。どうも無理やりって好きじゃないんだよねえ。」

んじゃ聞くね。八雲先輩はどこにいるのかな？・・・この家の中？」

こくん。瑠香は素直にゆつくりと頷いた。

「そう。八雲先輩は生きている？」

こくんこくん。大きく肯定の合図をした。

「よかった・・・じゃあそこまで判れば取り敢えずはいいや。

じゃあおうち入れてもらえるかな？俺さすがに鍵は持ってないんだよね」

手の力を緩めると同時、瑠香はその場に座り込んでしまった。

（この男・・・何者？吸血鬼？仲間なの？）

「あなたは・・・？」

「俺は岡見京介。八雲先輩の後輩で・・・」

「それは知ってるわ！そうじゃなくて・・・何で・・・吸血鬼つて・・・」

へへつと何か曖昧な笑みを浮かべ岡見は

「一応は吸血鬼一族の族長だもん、俺。」
と告げた。

衝動が生まれるとき（前書き）

お兄ちゃんに憧れるってのに憧れるであります！

衝動が生まれるとき

かつん、かつん。

階段を下りてくる音が聞こえた。

ただその音はいつもとは異なり2人分のように感じた。

（瑠香・・・じゃないのか？）

動けないときに見知らぬ来訪者・・・この状況に敏哉は身を固くした。

「せんぱーい！良かったあそんな死にそうってワケじゃないですね」

「岡見！？何でこんなトコに・・・」

お互いがお互いを確認し発したその声は場にそぐわないほどに緊張感に欠けており

ちょうど重なる形となった。

「よかった。瑠香さん。」

先輩は無事みたいだね。

よかったよかった。

おかげで君を罰する必要はなさそうだよ」

京介はほっとした。

吸血鬼一族では吸血行為自体は禁じていないが殺したりするような行為は

固く禁じておりもしも殺人などを犯した吸血鬼は極刑と決まっている。

それがもしも半端モノの吸血鬼でも同じだ・・・

瑠香を殺す必要がなくなり京介は内心ほっとした。

「岡見・・・なんで・・・瑠香・・・」

「いやぁ・・・先輩を初めて学校で見かけた時、何か同族の匂いがしたんすよね。」

でも話してみてもいくらどうみても人間だし・・・なんでだろう

な？って

ずっと思っていたんですよ。

その答えは瑠香ちゃん見て判りました。

瑠香ちゃんの方が血を濃くついでますね」

それで初めて瑠香を見たときあんなに驚いた表情を浮かべていたのか？

やつのことで口をひらき

「お・・・かみ・・・俺にはわからないんだが・・・同族って何だ？」
敏哉は狐につままれたような気持ちだった。

「あ、すみません。そうですね。瑠香さんと違って先輩は自覚ないんだっけ。

えっとですね。

先輩、最近瑠香さんに血吸われていることから判ると思いますが
瑠香さんって吸血鬼なんですよ・・・いや、違うぞ。

え・・・と・・・先輩と瑠香さんは吸血鬼の血を引いているんですよ」

ほんの少しですがね、岡見はちょっと肩を竦めながら付け足した。

「先輩の両親で・・・お父上さんは健在だったことなのでおそらく
母上さまの

方だと思うのですが・・・お年の割りに若くて綺麗なんじゃない
ですか？

または若くして精神を病んだことがあるとか・・・早死になさっ
たとか？

あ、すみません。

答え難いことをすけすけ聞いちゃって」

すまなそうにぺこりと頭を下げ謝った。

こうして見ているとさっきの脅迫している京介と

こっちの飄々とした京介とどっちが本性なのかわからない。

しかしながらきつとどちらも京介の一部であることは間違いないだ
ろう。

「え・・・と確かに母は瑠香産んですぐに死んだが・・・
同族って・・・吸血鬼？」

「ってことは岡見、お前吸血鬼なのか？」

敏哉は段々話が飲み込めてきたが話がわかったイコール納得出来たではない。

「吸血鬼ってお前・・・考えてみる！？今昼間だぞ？」

吸血鬼って日光ダメなんじゃないのか？

大体そんな化け物が日本にいるわけないだろ！？」

至極全うな意見を敏哉はまくしたてた。

「はは、やっぱりそう考えちゃうもんなんですかねえ。」

吸血鬼が日光に弱いってのは小説の中だけですよ。

実際は日光だろうがにんにくだろうが十字架だろうが大丈夫ですよ」

Vサインなんて作りながらおどけて答えた。

「そして何代・・・もしかしたら何十代も前のご先祖様が吸血鬼で・・・
そのままみんなは人間として生きていたけれど瑠香さんで先祖返りして

牙と吸血衝動が現れたんじゃないかなあ？」

現在は吸血鬼と人間の婚姻、および生殖は完全に管理されていて

吸血鬼一族側が関知しない混血児はいないが

昔だったら人知れず混血が生まれている可能性もあること、

今の瑠香はほとんど人間と変わりないが先祖の・・・

ハーフやクォーターくらいの子供は異様に寿命が長かったり生殖能力がなかったり

吸血衝動がみられたりしたのではないかと考えられること、

血が薄くなりにつれ精神に異常をきたし短命だった者や

寿命は人間の平均から大きく変わらないが周囲と比べ

異様に若く見えるものがいたのではないかと説明した。

「詳しくは知らないけれど・・・母は確かに・・・」

若く美しかった母。

精神に異常をきたし短命だった母。

母の親戚縁者がどのような人たちだったかわからない。

母がなくなってから水穂家とはほとんど交流がなかった。

「瑠香さんはいつ頃から吸血行動をとるようになったの？」

もう抵抗する気はないのだろう。

「もう・・・何ヶ月も前から・・・血が気になって・・・」

瑠香は憔悴したようにつぶやいた。

「そっか・・・じゃあ被害者は八雲先輩だけ？」

「はい・・・他の人の血には興味がなくて・・・」

そっかあ・・・

ちらりと京介は二人を見比べて

（他の人に興味がない・・・

つまり八雲先輩に特別な感情を持っていた可能性が高い？）

しかしそれは京介の口から語るべきことではないだろう。

吸血鬼は自分が好ましいと思った異性の血を欲する事が通例だ・・・

しかしもしかしたら血の薄い瑠香はより血を濃くするために

肉親である八雲に惹かれた可能性もある。

吸血（前書き）

何だか悪役じみてます。
京介さん。

吸血

「瑠香さんの吸血鬼としての血はきつともうすごく薄いものだから・
・

ソレを補うためにきつと八雲先輩の血に惹かれたんだろうねえ
どうする？瑠香ちゃん。

このまま半端吸血鬼でいたい？それとも普通の人間に戻る？」

瑠香はまだ片足だけ足枷につながれたままの敏哉に視線を向け一回
ゆっくりと瞬きすると

まっすぐに京介をみつめ

「戻ることが出来るなら・・・人間に戻りたいです・・・」

もう血なんて吸いたくない・・・お兄ちゃんを傷つけたくない・
・

泣くのをこらえるような震えた声で京介に懇願した。

「良かった。俺もそれがいいと思うよ。」

このまま中途半端に吸血鬼として先祖がえりしたら

そのうち傷害罪で捕まるか精神に異常を

きたしちゃう可能性が高いからねえ。

んつとね、治すからちよつと失礼なことしてもいい？」

「失礼なことつてなんですか？」

「えつと、とりあえず敏哉先輩の前でしたら俺殴られちゃうかも？」

あ、でも記憶どうせ消すからいいのかなあ？

なんてばやきながら悩んでいる風であった。

「ま、いつか。んじゃすみません、先輩、目瞑っていて下さい。」

瑠香さん、取り敢えず力抜いてくださいね？」

京介は瑠香の肩に手をかけその細い首筋に唇を近づけた。

瑠香は一瞬身を固くしたがすぐに力を抜きそのままされるがままに
なった。

こくん・・・どれくらい血を抜いたかは判らない。

でも京介が嚙下運動をしたのは2回程度だったの
量としてはそんな多くはないだろうが

唇を離れた途端、瑠香はがくと崩れ京介の腕に預けられた。

「ごちそうさまです。」

えっと吸血鬼としての血は全部いただきました。

八雲先輩はまだ先祖返りしてないから・・・そうっすねえ
先輩も吸血鬼として目覚めちゃったらそんな時もいますね」

どうせ吸うなら可愛い女の子の血のがいいですからねえ

って照れ笑いを浮かべながら頭をかく仕草をした。

「あの・・・瑠香は・・・」

「ああ、もちろん無事ですよ。」

ちよっと血もらっただけですから。

ついでにここ数日の記憶抜いておきました。

学校の記憶もないから数日間の授業内容真っ白っすねえ。

申し訳ないっすねえ」

意識のない瑠香を優しく抱きかかえ敏哉の繋がれているベッドに寝
かせた。

「先輩、お疲れ様です。」

あ、コレもう少しで外れそうだったんですねえ」

京介は敏哉の足枷を、さして力をかけてなさそうなのに
さっきまでびくともしなかったボルトを事もなげにはずした。

「よかったよかった。取敢えず生きてるし怪我也なさそうですねえ。

あとは先輩の記憶消しておけばいいかなあ」

「記憶って・・・そんなに簡単に消せるものなのか？」

「まあ簡単ってワケじゃないですがねえ。」

んとなえ慣れれば結構イケますよあ？

あ、でも記憶操作系は俺とか吸血鬼よりも夢魔族とかのが得意っ
すよあ」

夢魔？

何だか小説でしか聞いたことないような単語に目を丸くする。

しかしもう何があってもきつと驚かない。

瑠香に・・・そして俺にも吸血鬼の血が入っているのだから。

「ってことで先輩。色々これからのためにも忘れて下さいね」

京介の手が敏哉の額に添えられた途端、敏哉の意識は暗闇へ落ちていった。

吸血（後書き）

次で最後です。

日常へ（前書き）

やっと終わります！

長々とありがとうございます！！

日常へ

春休み明けの初日。

長かった休みのせいでいささかボケた頭でもつても授業の受講ガイダンスは

滞りなく終わりあとは配属される研究室へ挨拶しに行くだけとなった。

敏哉は同じ研究室に配属されるクラスメートを探そうと

理工学部棟ロビーをうろろろしていたら岡見の姿を見つけた。

「お、岡見。」

「あ、八雲先輩。春休みはどうでした？」

岡見とは春休み前の学校最終日にあつて以来だ。

「何かだらだらし過ぎたような気がするよ。岡見は？」

「えゝ、だったら先輩。飲みにも行きたかったですねえ」

飄々とした風情で岡見は愛嬌良く答えた。

そつだ、春休みといたら・・・

「なあ岡見、俺なんか岡見の事で忘れていることある気がするんだけれど・・・」

何か岡見との約束とか忘れてないか？」

何かを忘れているような気がする。

重要なことかそうじゃないかですら思い出せないくらい微かな気掛かりではあるが。

「え？・・・んー・・・なんすかねえ？」

すみません。俺思いつかないっす」

ひとしきり悩んで岡見はすまなそうに肩をすくめた。

学科が違つ岡見に授業関係の何かを頼んだり頼まれたりすることはまずない。

ゲームや本など借りたかつたらそれは覚えているだろう。

さて・・・なんだろうか？

「そつか・・。じゃあ思い出したら言っよ」

「忘れるってことはきつと大したことじゃないってことっすよ」
軽い調子で岡見はにっこりと笑いだした。

そんな笑顔に愛嬌があっただけで本物の弟のような錯覚すら覚える。

「そっかなあ？」

「そうっすよ。あ、また先輩んちにゲームしに行ってもいいっすかあ？」

日常へ（後書き）

ありがとうございました。

岡見京介、彼メインで書いてみたいです。

長くなってしまいましたがここまで読んでいただき
本当にありがとうございます！

感想いただけるとすごくうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795b/>

Egoistic Reality

2010年10月9日23時45分発行